常設研究

明治期仏教雑誌の研究

主任　赤松徹眞

研究員　中川修
藤原正信
中西直樹
市川良文
佐藤智水
吉永進一
近藤俊太郎

本研究は、明治以降の刊行された仏教雑誌に関する研究を目的とする。本学図書館には多くの仏教雑誌を所蔵しており、ことに本学並びに本願寺派に関わる貴重な雑誌を所蔵している。本学は、すでに「三五〇年史」に関わって、関係史料及び通史を刊行しているが、今後、「四〇〇年史」を見通すとき、明治期の仏教雑誌の研究、雑誌の復刊・デジタル化に向けた基礎研究は貴重な課題である。あわせて普通教校（文学寮）の開設時期の本学の実態研究を推し進める必要がある。

そこで、過去二年間においては、明治期刊行の本学・本願寺派関係雑誌のなかから、特に重要度の高いものについて、その次号を補いつつ全号のデータ蒐集に向けた事業を推進してきた。ほぼデータ蒐集が完了した雑誌は、『令知会雑誌』『伝道会雑誌』『圀教』の三誌であり、今後この三誌の復刻事業に向けて出版社と交渉していく予定である。

上記のうち、すでに『國教』は復刻が決定しており、二〇一六年六月に刊行予定となっている。今回研究の中間報告として、中西直樹研究員の作成した『國教』（関係誌『九州仏教軍』を含む）の解説論文と全号総目次を以下に収録した。（赤松徹眞）

雑誌『國教』にみる通仏教的結束とその挫折

――一八九〇年代初頭九州における真宗の動向を中心に――

中西直樹

八淵蟠龍と中西牛郎　雑誌『國教』は、一八九〇（明治二三）年九月二五日に熊本市安巳橋通町（現・熊本市中央区安政町）にあった國教雑誌社から創刊された。國教雑誌社は、真宗大谷派願正寺の境内地に附設されていたようであり、一号から八号まで発行兼印刷人をつとめた篠方典は同寺住職であった。[1] しかし、編集・経営面での事実上の責任者は八淵蟠龍であり、[2] 当初主筆として社説を担当したのが中西牛郎であった。[3] まずは、この両名の『國教』創刊に至るまでの経歴を紹介しておこう。

八淵蟠龍[4]は、一八四八（嘉永元）年、熊本県上益城郡御船町小坂の東福寺（浄土真宗本願寺派）に生まれ、父は同寺住職厳城であった。蟠龍は豊後戸畑満福寺の南溪の学寮で修学した後、東福寺住職を継職し、一八七六（明治九）年には薩摩布教に着手して多大な成果を挙げ、七八年に本山が教区・組制度を布いた際には地元寺院から組長に選出されている。その後も、地元の僧俗を糾合して法住教社という仏教結社を組織し、神水義塾という教育機関にも関わるなど、熊本を拠点に幅広い活動を展開していた。

一方、中西牛郎[5]は、一八五九（安政六）年に熊本城下の漢学者の家に生まれ、維新後に東京の勧学義塾などで英語を学んだ後、同郷の徳富蘇峰らの仲介で同志社に転学したが、在学中から赤松連城・南條文雄ら真宗僧侶と交わり仏教へと傾倒していった。その後帰郷した中西は、一八八一（明治一四）年に郷土熊本で神水義塾を開いた。神水義塾はのちに八淵蟠龍との共同事業となり、八淵蟠龍が『三国仏法伝通縁起』『八宗綱要』をテキストに仏教総論を講じ、中西牛郎が英語・仏語を担当し、牛郎の父惟格が漢学を受持った。その際に生徒数は一五〇名に達し、適

宜仏教学者を招いて講演会も開かれたようである。そのかたわら中西は、済々黌でも教鞭を執り、翌八二年に佐々友房・津田静一らが『紫溟雑誌』を創刊するとその主筆となり、同誌が隔日新聞『紫溟新報』（のちに日刊）となってからも引続き主筆として健筆をふるった。『紫溟雑誌』『紫溟新報』は紫溟会から発行され、八八年に『九州日日新聞』と改題されている。また発行元の紫溟会は、明治十四年の政変の最中の一八八一年九月に結成され「皇室を翼載し立憲政体を賛立し以て国権を拡張す」などを規約に掲げ、当初は民権派の相愛社関係者も参加したが、のちに離反した。八五年に紫溟学会に改組され、八九年一月には紫溟学会の世務部として熊本国権党が結成されている。(6)

当時、一八九〇年七月の第一回帝国議会の衆議院選挙をひかえて政治的緊張が高まるなか、中西牛郎の関わった済々黌・神水義塾―『紫溟雑誌』―紫溟会・国権党は、国家主義者側の陣営にあって仏教とも密接な関係を有し(7)、キリスト教者である徳富蘇峰らの神水義塾―『東肥新報』―相愛社・九州改進党の自由民権論者側と対立関係にあったようである。戦前戦後に熊本の地方文化の発展に尽くした荒木精之は、中西と徳富蘇峰の関係について次のようなエピソードを紹介している。

> そのころ徳富蘇峰は大江村に大江義塾をひらいて、かたわら東肥新報などに自由民権論をふりまわしていた。かねてそれをにがにがしく思っておつた彼（中西牛郎）は、ある日直接大江義塾に蘇峰をたずねて、
> 「ルソオの民約論ちゆう本をおかしいただきたい」といつた。
> 「何をなさるのですか」
> 「貴公らがさかんに民約論バふりまわすので一ぺん読んでみて、それから貴公らを攻撃しようと思う」
> 「それはおもしろい」
> と蘇峰も微笑んで快く貸してやつたという話がのこつている。(8)

その後中西は一八八九年二月に『宗教革命論』という書を出版し、そのなかで、近い将来に仏教は新たな変革を遂げることによって退勢を挽回し、キリスト教に代って宗教界を席巻するにちがいないという展望を述べた。この書は、本願寺派の法主大谷光尊（明如）の眼にとまり、中

西は京都在学時代に親交があった赤松連城の呼び出しを受け、本願寺からの資金援助を受けて、海外視察に赴くこととなった。一八八九年六月に渡米した中西は、約半年間滞在して当地の宗教事情、比較宗教学の研究動向などを見聞した。翌九〇年一月に帰国した中西は、九月に『國教』の創刊に関わり、一〇月には本願寺派経営の文学寮に教頭兼教授として招かれ比較宗教学等の講義を担当した。[9] そのかたわら、『組織仏教論』『宗教大勢論』『新仏教論』などを次々と上梓して精力的な著述活動を展開した。

雑誌発行意図と九州仏教団との関係　『國教』発刊の意図は、創刊号掲載の社説「國教発行之旨趣」とほぼ毎号に掲載された「國教雑誌社規約」によくあらわれている。まず「國教発行之旨趣」では、国教を「其人教なるが故に之を国教と謂ふなり。此国家に限るの宗教と謂ふにあらさるなり。其国家の独立生存を保持する勢力ある故に之を国教と謂ふなり」と定義づける。そして、こうした国教たる資格を有するものは仏教のほかにはないとして、次のように記している。

> 故に仏教の外に如何なる宗教あるも。其真理は以て仏教界中の真理たるに過ぎす仏教の外に如何なる学術あるも。其真理は亦以て仏教界の真理たるに過ぎず。（中略）只天地を貫き万世に経りて変せざるものは仏教あるのみ。故に仏教の信仰に由りて人心一致すれは。其国家斯に富強治平の福祉を招き。其国民斯に独立不覇の気象を生し。四方万国に対し。長く以て優者勝者の地位を保つに足ること論を待たす。而して仏教は世界宗教の最高最大なる真理を具したるものなり。

諸宗教に対する仏教の絶対的優位性は、中西牛郎が前述の『宗教革命論』で強調したことである。また、諸宗教の説く真理はすべて仏教に包摂されるという見解も、中西がアメリカから帰国直後の一八九〇年五月に上梓した『組織仏教論』なかに示されている。[10] この「國教発行之旨趣」は中西の執筆によるものと考えられ、第一回帝国議会の衆議院議員選挙後に政治的・宗教的対立が深まる熊本にあって、キリスト教者・自由民権論者に対抗するため、仏教者・国家主義の立場を意識して書かれたものと考えられる。

ところで、仏教による国民統合の実現に向けては、宗派間の対立を超えた通仏教的結束が必要となろう。この点の必要性を標榜しているのが

「國教雑誌社規約」であり、その最初には次のように記されている。

一仏教拡張の初歩とし雑誌社を組織し毎月一回雑誌を発行し正会員及ひ賛成員に頒布すべし。本誌は当分は宗派に偏せず教会に党せず普く宗教界に独立して仏教の真理を開闡し仏徒の積弊を洗滌して之が改良を図る。

そして、こうした通仏教的結束の実動団体が九州仏教団であった。佐々木憲徳は『八淵蟠龍伝』のなかで、『國教』を法住教社の機関誌であったとしているが[11]、そのようなことをうかがわせる記述を『國教』の誌面から見出すことはできない。法住教社は、一八八〇年五月に本願寺派の三業派僧俗により組織されたが[12]、結社から『國教』創刊に至るまでの一〇年間に法住教社と九州真宗を取り巻く状況は大きく変化した。『國教』は、八淵蟠龍ら法住教社の関係者が中心的役割を担いつつも、その対抗関係にあった同じく本願寺派の聞信派系の熊本酬恩社も協力し、さらに九州の仏教勢力を糾合して結成された九州仏教団の機関誌として刊行されたと考えるべきであろう[13]。

多彩な特別寄書家と諸団体の連携　『國教』は、熊本という一地方からの発行ではあったが、九州地方はもとより、当時の仏教界全体に大きな影響を与え、全国的にも知られた雑誌であった。その一端は、第一号と第二号（以下、号数は通号を記載）に掲載された次の多彩な特別寄書家の顔ぶれからも知ることができる。

井上圓了（文学士）、池松豐記（海西日報主筆）、服部宇之吉（文学士）、堀内静宇（浄土教報主筆）、土岐善静、戸城伝七郎、大内青巒（尊王奉仏大同団幹事）、辰巳小次郎（文学士）、東海玄虎（仏教書院々主）、津田静一（文学館主）、南條文雄（文学博士）、中西牛郎、中村六蔵（文学精舎舎長）、中山理賢（法話主筆）、中川小十郎（教育報知主筆）、松山松太郎（海外仏教事情主筆）、藤島了穏（哲学館講師）、藤岡法真（酬恩社社長）、秋山銀二郎（九州之文華記者）、天野為之（文学士）、佐治実然、澤柳政太郎（文学士）、三宅雄二郎（文学士）、平松理英、久松定弘（貴族院議員）、平井金三（オリエンタルホール館主）、鈴木券太郎（哲学館講師）、岩堀知道（密厳教報主筆）、小栗栖香

頂（真宗大谷派一等学師）、神代洞通（開明新報）、辻敬之、前田慧雲（真宗問答著者）、藤田祐真（大同新報）、朝比奈知泉（東京新報主筆）、志方熊記（九州日々新聞記者）、釋宗演（錫蘭島史著者）[14]

まず仏教関係者では、当時の仏教界をリードした僧侶・在家信者が宗派に関係なく名を連ねており、特に井上圓了・南條文雄・小栗栖香頂・中山理賢など大谷派の有力者が目立つ。本願寺派では、松山松太郎・神代洞通ら普通教校教員・海外宣教会の幹事が名を列ねており、國教雑誌社・九州仏教団と海外宣教会との密接な関係がうかがえる。[15] また、堀内静宇（浄土宗）・岩堀知道（真言宗）ら当時活発であった各宗派の仏教系新聞雑誌の関係者が多い。『國教』一二号に八淵は「仏教の新聞雑誌を連合同盟するは教界の急務」との論説を発表しており、当時、仏教系諸団体・新聞雑誌の提携を目指す動きもあった。その中心的役割を担っていたのが、國教雑誌社とも関係の深い開明新報社であり、その成果は『日本仏教現勢史』としてまとめられている。[16]

大内青巒・井上圓了・辰巳小次郎・佐治実然・前田慧雲・藤田祐真ら尊皇奉仏大同団の有力メンバーが多数参加していることも注目される。尊皇奉仏大同団は、『國教』創刊に先立つ一八八九年一月に結成され、その規則で「皇室ノ尊栄ヲ保護シ仏教ノ勢力ヲ拡張シテ以テ大日本帝国ノ元気ヲ充実セシムル」ことを目的に掲げ、政治・宗教教育・経済など多様な事業を展開するとしており、その主義主張は國教雑誌社にきわめて近いものがあった。[17]

仏教関係者以外でも教育界・言論界で名を馳せた人物が数多く名前を連ねており、地元熊本で活躍する人物に加えて、中央にあって全国的に知られた知識人も多い。地元熊本では、池松豊記・津田静一・中村六蔵・志方熊記ら熊本国権党に連なる保守系人物が多く名を連ねている。彼らは中西牛郎とも密接な関係があったが、八淵蟠龍とも懇意であったようであり、例えば、熊本市内で文学精舎という私立学校を経営していた中村六蔵は、創刊号に寄せた「國教ノ発刊ヲ祝ス」のなかで、「余ガ知人。八淵蟠龍氏篤爰ニ大ニ感奮スル所アリ。國教雑誌ヲ発刊シ」と記している。[18] 中川小十郎・天野為之・久松定弘・三宅雄二郎・朝比奈知泉ら中央の政界・言論界・教育界で活躍した人物は、中西牛郎の勧誘により参加したものと推察される。のちに東京帝国大学教授・ハーバード大学教授・東方文化学院院長などを歴任した服部宇之吉は、創刊号に「中西君國教と題して一の仏教主義の雑誌を発刊せらる。中西君の仏教に於ける世上自から定評あり」と記している。当時『反省会雑誌』も中西牛郎

を井上圓了と並ぶ仏教界の「二大光星」と評しており[19]、中西は当時すでに中央でも知られた人物であった。

総じて言えば、『國教』は、第一回帝国議会の衆議院議員選挙と国粋主義の台頭を背景として、特に自由民権と国家主義、キリスト教と仏教の対立が激化した熊本にあって、九州の仏教勢力と熊本保守系人脈が結びつき、これを中央の各界有力者も支援して発行されたと言えるであろう。

創刊後の展開と雑誌名変更　創刊後の『國教』は六号まで毎月二五日に刊行されおり、当初の雑誌の発行事業は順調に推移したようである。三・四号掲載の「本社正社員姓名」から熊本の僧俗が続々と加入したことがうかがえ、一八九一年六月下旬には正社員二千余名に達した[20]。四号「特別社告」では好評につき一千余部を増刷し正社員外にも販売することが告知された。また、四号の巻末に本誌特約大売捌所として、熊本・佐賀・京都・大阪・神戸の書店等が記載されている。七号と八号の発行は隔月刊行となっているが、これは七号「社告」によれば、編輯者の病気が原因であり、編輯者は九号より吉村真治に変更されている[21]。

ところが、八号発行後の一八九一年七月に熊本県知事松平正直より「出版条例第二条但書範囲外ニ渉リ候ニ付客年九月九日許可ノ指令取消候旨其筋ヨリ達アリタルニ付此旨相達ス」との指令を受けた[22]。出版条例の当該条文は以下のとおりである。

> 第二条　新聞紙又ハ時々ニ発行スル雑誌ヲ除クノ外文書図書ノ出版ハ総テ此条例ニ依ルヘシ但雑誌ニシテ専ラ学術技芸ニ関スル事項ヲ記載スルモノハ内務大臣ノ許可ヲ得テ此条例ニ依ルコトヲ得[23]

この条文から察するに、本来内務大臣の許可を得るべきところ、熊本県知事の許可を得て雑誌を発行していたことが問題とされたようである。國教雑誌社側は改めて『第二國教』として発行する旨を申請して許可を得たようであるが、一二号掲載の「特別社告」には、逓信省の郵送料の減免認可を得られず、月二回発行として二冊分を発送することにしたことが記されている。この時期に『國教』発行の許認可を改めて問題にし、郵送料の減免申請を不認可とした背景には、何らかの政治的な意図があったことも考えられるが、詳細は不明である。

ところで、上述のような事情から、通号八号から一五号までは『第二國教』として発行され、一六号から再び『國教』に雑誌名を復し、一七

号から号数を通号とした。各号の雑誌名・発行年月日は以下のとおりである。

（通号　一　号）『國　教』　第一　号　一八九〇（明治二三）年　九　月二五日発行
（通号　二　号）『國　教』　第二　号　一八九〇（明治二三）年一〇月二五日発行
（通号　三　号）『國　教』　第三　号　一八九〇（明治二三）年一一月二五日発行
（通号　四　号）『國　教』　第四　号　一八九〇（明治二三）年一二月二五日発行
（通号　五　号）『國　教』　第五　号　一八九一（明治二四）年　一　月二五日発行
（通号　六　号）『國　教』　第六　号　一八九一（明治二四）年　二　月二五日発行
（通号　七　号）『國　教』　第七　号　一八九一（明治二四）年　四　月二五日発行
（通号　八　号）『國　教』　第八　号　一八九一（明治二四）年　六　月一〇日発行
（通号　九　号）『第二國教』　第一　号　一八九一（明治二四）年一〇月一〇日発行
（通号一〇号）『第二國教』　第二　号　一八九一（明治二四）年一一月二〇日発行
（通号一一号）『第二國教』　第三　号　一八九一（明治二四）年一二月一七日発行
（通号一二号）『第二國教』　第四　号　一八九一（明治二四）年一二月三〇日発行
（通号一三号）『第二國教』　第五　号　一八九二（明治二五）年　一　月（発行日不明・欠本）
（通号一四号）『第二國教』　第六　号　一八九二（明治二五）年　二　月　五　日発行
（通号一五号）『第二國教』　第七　号　一八九二（明治二五）年　二　月二九日発行
（通号一六号）『國　教』　第八　号　一八九二（明治二五）年　三　月二五日発行
（通号一七号）『國　教』　第一七号　一八九二（明治二五）年（発行月日不明・欠本）
（通号一八号）『國　教』　第一八号　一八九二（明治二五）年一二月二〇日発行

（通号一九号）『國　教』　第一九号　一八九三（明治二六）年一　月二五日発行
（通号二〇号）『國　教』　第二〇号　一八九三（明治二六）年三　月三〇日発行
（通号二一号）『國　教』　第二一号　一八九三（明治二六）年四　月三〇日発行
（通号二二号）『國　教』　第二二号　一八九三（明治二六）年六　月七　日発行
（通号二三号）『國　教』　第二三号　一八九三（明治二六）年六　月三〇日発行
（通号二四号）『國　教』　第二四号　一八九三（明治二六）年八　月五　日発行
（通号二五号）『國　教』　第二五号　一八九三（明治二六）年八　月三〇日発行
（通号二六号）『國　教』　第二六号　一八九三（明治二六）年九　月三〇日発行
（通号二七号）『國　教』　第二七号　一八九三（明治二六）年一一月六　日発行
（通号二八号）『國　教』　第二八号　一八九三（明治二六）年一二月七　日発行
（通号二九号）『國　教』　第二九号　一八九三（明治二六）年一二月三〇日発行
（通号三〇号）『國　教』　第三〇号　一八九四（明治二七）年四　月二七日発行
（通号三一号）『國　教』　第三一号　一八九四（明治二七）年六　月一一日発行

上記のうち、一三号と一七号は現物を確認できず欠本となっている。また、佐々木憲徳著『八洲蟠龍伝』には、三四号まで発行されていたとの説があると記されているが[24]、現時点で三一号までの存在しか確認できていない。

誌面の変化と万国宗教大会　雑誌の前半期に目立つのはキリスト教批判である。「耶蘇教は之を排斥せざるべからず仏教は之を改良せざるべからず」（一～三号）、「耶蘇教は父子論を破壊する宗教なり」（三号）、「耶蘇教排斥論」（四号）、「耶仏の二教」（七号）、「宗教取捨弁」（八・九号）、「尾濃の戦に基督教奇兵を用て仏教の大群に敵す」（一〇号）、「基督教徒に謝し併せて其教の衰頽に就くを吊ふ」（一一号）、「耶蘇教と戦ふ

可きは斯時に在り」（一六号）など、毎号のようにキリスト教を意識した論説・寄書が掲載されている。

ところが、一八九二年三月発行の一六号後にしばらく雑誌の発行が途絶え（一七号は欠本）、同年一二月に一八号が発行されて以降の誌面にはやや変化がみられる。露骨なキリスト教批判は影をひそめ、シカゴ万国宗教大会と夏期講習会などの具体的事業に関する記事が多く掲載されるようになった[25]。この間、四月には海外宣教会の松山松太郎が九州を訪れ、國教雑誌社との提携を模索したようである[26]。また一八号からは、編輯者が森直樹に変更となった。森直樹の経歴は詳らかではないが、一八九三年五月に國教雑誌社から刊行された『仏教対外論』の編者としても名が挙がっており、その序文「仏教対外論に題す」のなかで仏教の世界的運動の必要性を主張している[27]。このほか、「森直樹」または「黙々居士」のペンネームで『國教』や『反省会雑誌』にいくつかの論説を発表している[28]。おそらく森は、國教雑誌社の編集責任者として、同社内に九州仏教同盟会本部を設置して八淵蟠龍の万国宗教大会への派遣資金の募集に尽力し、八淵の渡米中は『國教』の編集発行の中心的役割を担ったと考えられる。広く熊本県下僧俗もこの募金に応じ、『國教』二六号・二九号附録に寄附者の氏名が報告されている。

この万国宗教大会への派遣事業が國教雑誌社の最大かつ最後の関連事業となったようであり、八淵蟠龍の凱旋帰国を記念する一八九四年六月発行の三一号が現存を確認できる最後の号となっている。翌月には日清戦争が勃発しており、キリスト教との対立から通仏教的に結束する意義も薄れるなかで、おそらく三一号をもって廃刊になったと推察される。

雑誌『九州仏教軍』と九州仏教倶楽部　『國教』以外にも、当時の九州仏教勢力の結束により刊行された雑誌が数誌存在したようである。その一つが『九州仏教軍』である。『九州仏教軍』は、中西牛郎を主筆とし、九州仏教倶楽部の機関誌として一九〇一（明治二四）年七月に創刊された。当時、中西牛郎が文学寮の教頭兼教授として京都に居を構え、そのもとに集まった九州出身者の親睦団体として組織されたのが九州仏教倶楽部であった。ところが、九州仏教団が内部分裂などにより次第に活動が停滞していくと、九州仏教倶楽部は、その事業を継承しようとする動きをみせ、前述の九州夏期講習会も同倶楽部の事業として開催された[29]。この『九州仏教軍』は現時点で創刊号しか存在を確認できていない。さらに一八九二年七月に起こった文学寮改正事件で中西牛郎が失脚すると、九州仏教倶楽部の活動も停滞していったようである[30]。

このほか、一八九二年頃には、福岡県御井郡金島村（現・久留米市）にあった真仏教社から『真仏教軍』という雑誌が発行されていた。同誌

は「仏教の真理を顕揚するにありて宗派と政党に関せず」を主義とし、中西牛郎が主筆をつとめていたが、現物は未見である。(31)

一八九〇年七月の第一回帝国議会の衆議院選挙による政治的対立に、仏教・キリスト教の勢力争いがからんで、熊本を中心に九州地方では広く通仏教的結束が高揚した。しかし、一八九四年に日清戦争の勃発により、こうした対立構図が崩れると、一挙にその通仏教的結束は終息に向かっていったと考えられる。(32)

註

（1）『國教』の発行兼印刷人は、九号から志垣弘に変更されている。同誌一九号巻末の新年の挨拶で、篠方典の肩書が「福岡県三池郡大牟田町熊本監獄支署在勤」と記されていることから、教誨師として職務のため自坊を離れ、発行兼印刷人も変更になったのかもしれない。『國教』の奥書によれば、その後、國教雑誌社の所在地は同じ町内に移転しているが、詳しい事情は不明である。なお、本論中の『國教』の号数は、すべて通号を記載した。

（2）佐々木憲徳著『八淵蟠龍伝―明治教界の大伝道者―』には、「編集並に経済面の事実上の責任者は八淵蟠龍であった」と記されている（三五頁、百華苑、一九六八年）。『國教』誌上でも、一九号巻末の新年の挨拶や二六号巻頭の広告などで「社主八淵蟠龍」と記載されている。

（3）『國教』三号の社説の冒頭で、中西牛郎が「本社の社説は余が担当に係るを以て」と記していることから、初期には中西牛郎が主筆として社説を担当したと考えられる。一号から六号までの社説には執筆者名が明記されておらず、七号に島地黙雷、八号に八淵蟠龍の氏名が記載され、その後、草野本晢・中西牛郎・八淵蟠龍・森直樹らが執筆しており、無記名の場合もある。なお、『國教』一九号巻末の新年の挨拶での中西の肩書は「発起人」となっている。

（4）八淵蟠龍伝の経歴は、前掲『八淵蟠龍伝―明治教界の大伝道者―』のほか、常光浩然著『日本仏教渡米史』（三六四～三六八頁、仏教出版局、一九六四年。のちに中西直樹編『仏教海外開教史資料集成（北米編）』第五巻所収、不二出版、二〇〇九年）を参照。

（5）中西牛郎の経歴については、荒木精之著『熊本県人物誌』（三八九～三九二頁、日本談義社、一九五九年）、角田政治著『肥後人名辞書』（一一一頁、肥後地歴叢書刊行会、一九三六年）、中西自身の著書『神の実現としての天理教』の序（平凡社、一九二九年）、「新仏教論の目的を明にす」（『反省会雑誌』七年二号、一八九二年二月）などによった。

（6）紫溟会・熊本国権党については、上村希美雄著『熊本国権党の成立』（『近代熊本』№17、熊本近代史研究会、一九七五年九月）、能田益貴編『梅溪津田先生伝纂』（津田静一先生二十五回忌追悼会、一九三三年）を参照。

（7）『國教』三号掲載の「日刊新聞発行の計画」には、九州仏教団の機関新聞の発行に頭山満（熊本国権党首）が資金を拠出すると記されている。この計画は実現しなかったようだが、九州仏教団と『國教』、熊本国権党との密接な関係のあったことがうかがえる。津田静一も「夫れ我国従来の宗教は、神道仏教の二道にして（中略）共に我国に鴻益を与ふるものして、吾党飽まで維持せんと欲する所のものなり」と述べ、「外教撲滅」を主張している（前掲『梅溪津田先生伝纂』一六六頁）。

（8）前掲『熊本県人物誌』。このエピソードは、荒木精之著『熊本人物鉱脈』（一三八～一四〇頁、熊本日々新聞社、一九六三年）にも記されている。

（9）中西の米国視察期間は、「中西牛郎氏」（『反省会雑誌』五年二号、一八九〇年二月）の記事より知れる。また中西は文学寮教頭兼教授に採用されたことは、「中西牛郎氏」（『反省会雑誌』五年一〇号、一八九〇年一〇月）の記

事より判る。

(10) 中西牛郎著『組織仏教論』（敬虔社、一八九〇年）。この点は、中西直樹著「日本ユニテリアン協会の試みと挫折―宗教的寛容と雑居性との狭間のなかで―」（『龍谷史壇』一一四号、二〇〇〇年三月）のなかで、かつて論じた。

(11) 前掲『八淵蟠龍伝―明治教界の大伝道者―』三五頁。

(12) 磨墨功洞編『法住教団百年史―能化の水は涸れず―』（法住教団、二〇〇九年）を参照。

(13) この点は、中西直樹・吉永進一著『仏教国際ネットワークの源流―海外宣教会（一八八八年～一八九三年）の光と影』第三章（三人社、二〇一五年）のなかで論じた。

(14) 『國教』二〇号によれば、その後、杉浦重剛（東京文学院教頭・日本中学校長）・西松二郎（理学士）・菅虎雄（文学士）・今井常郎（東京文学院講師）の四名が特別寄書家に加えられている。

(15) この点に関しては、別稿で詳しく論じた（前掲『仏教国際ネットワークの源流―海外宣教会（一八八八年～一八九三年）の光と影』第一章）。

(16) 月輪正遵編兼発行『日本仏教現勢史』（一八九二年）。全国の仏教系諸団体・新聞雑誌の現況掲載を懇請する広告は、『海外仏教事情』二三集（一八九一年八月）などに掲載されている。

(17) 大内青巒著『尊皇奉仏論』（尊皇奉仏大同団事務取扱所、一八八九年）。

(18) 中村六蔵の経歴は、高橋義夫著『幻の明治維新―やさしき志士の群―』（創世社、一九七七年）に詳しく紹介されている。

(19) 化堂（菊池謙譲）著「著述家として井上中西二氏、宗教大勢論を評す」（『反省会雑誌』六年三号、一八九一年三月）。

(20) 『國教』通号九号（『第二國教』一号、一八九一年一〇月）所載の「第二國教発刊に就て」。

(21) 九号掲載「社告」によれば、吉村真治は一八九〇年八月より『國教』の京都記者をしていたが、九一年六月に帰郷し國教雑誌社で『第二國教』の編輯を担当することになった。しかし、一一号掲載「社告」によれば、九一年一二月に吉村はいったん退社し、引き続き客員として編輯に従事したようである。なお吉村は、一九八九年七月に京都で『僧侶政権論』という僧侶への参政権付与を求めた冊子を出版している。吉村は『國教』に数編の評論を発表しているが、六号の無名生「僧侶被選挙権の請願に就て」も吉村の執筆によるかもしれない。

(22) 註(16)参照。

(23) 『明治二十年法令全書』上巻、二四五頁（内閣官報局）。

(24) 前掲『八淵蟠龍伝―明治教界の大伝道者―』四一頁。

(25) 万国宗教会議と夏期講習会については、すでに前掲『仏教国際ネットワークの源流―海外宣教会（一八八八年～一八九三年）の光と影』第三章のなかで論じた。

(26) この点についても、前掲『仏教国際ネットワークの源流―海外宣教会（一八八八年～一八九三年）の光と影』第一章のなかで論じた。

(27) 森直樹編『仏教対外論』（國教雑誌社、一八九三年）。

(28) 『反省会雑誌』及び『國教』に森直樹または黙々居士の名で掲載された論説は以下のとおりである。

京都 森直樹「血涙を抑つて満天下の仏教徒に訴ふ」（『反省会雑誌』第六年六号、一八九一年六月）

黙々居士「中西氏の新仏教論将さに出てん」（『反省会雑誌』第六年七号、一八九一年七月）

鎮西東肥生 森直樹「印度仏陀伽耶回復に就ひて日本全国の仏教徒に檄す」（『反省会雑誌』第六年八号、一八九一年八月）

黙々居士「我国宗教上に於ける九州の形勢を論ず」（『反省会雑誌』第六年一〇号、一八九一年一〇月）

森直樹「我国宗教上に於ける九州の形勢を論す（承前）」（『國教』一四号、一八九二年二月）

森直樹「井上圓了氏と中西牛郎氏を対照論評す」（『國教』一五・一六号、一八九二年二月・三月）

黙々居士「明治二十五年の歳晩に臨み満腔の感慨を迸洩す」（『國教』一八号、一八九二年一二月）

黙々居士「日本仏教の運勢と四囲境遇の変遷」（『國教』二一号、一八九三年四月）

黙々居士「日本仏教徒と世界的観念」（『國教』二二号、一八九三年六月）

黙々居士「明治二十六年の仏界を回顧す」（『國教』二九号、一八九三年一二月）

森直樹「亡友滑水吉太郎を哭す」（『國教』二六号、一八九三年九月）

森直樹「万国宗教大会凱旋者八淵蟠龍師を歓迎す」（『國教』三一号、一八九四年六月）

上記の内、「我国宗教上に於ける九州の形勢を論ず」が森直樹と黙々居士の名で、『反省会雑誌』と『國教』の両誌に掲載されていることから、両者が同一人物であることが知れる。ただし、内容的に『反省会雑誌』発表のものは、『國教』発表のものの抄録のようである。ちなみに、『國教』一三号は欠本であり、一四号掲載のものも未完となっている。

また上記から類推するに、森は当初京都にあって中西牛郎の強い影響を受け、その後、帰熊して『國教』の編集に従事したと考えられる。前掲『仏教対外論』の奥書で、森の住所は熊本県玉名郡石貫村と記されている。

(29) 九州仏教倶楽部のことについても、すでに前掲『仏教国際ネットワークの源流―海外宣教会（一八八八年～一八九三年）の光と影』第三章のなかで論じた。

(30) 文学寮改正事件に関しては、中西直樹著「明治期仏教教団の在家者教育の一齣―一八九二年「文学寮改正事件」と中西牛郎―」（赤松徹真編『日本仏教の受容と変容』所収、永田文昌堂、二〇一三年）を参照。

(31) 『海外仏教事情』二八号（一八九二年九月）巻末の広告による。

(32) 日清戦争後の宗教界の動向に関しては、中西直樹「日清戦争後宗教の動向―戦後世論と宗教家懇談会をめぐって―」（『佛教史研究』三四号、一九九八年四月）を参考。

雑誌『國教』総目次

通号1号（『國教』第1号）一八九〇（明治二三）年九月二五日発行

國教雑誌規約

祝詞
- 國教の発刊を祝す　文学博士　南條文雄
- 國教ノ発兌ヲ祝ス　津田静一（梅溪）
- 國教ノ発刊ヲ祝ス　中村六蔵
- 國教の発刊を祝す　藤岡法真
- 國教に寄す　文学士　服部宇之吉
- 國教の発刊を祝す　加藤熊一郎

社説
- 國教雑誌發行ノ旨趣　中西牛郎

論説
- 九州仏教団に就て　藤島了穏（胆岳）
- 苦痛の原由　戸城伝七郎
- 疑問一則　静宇居士
- 品位の説　文科大学得業士　服部宇之吉

翻訳
- 旧心理学と新心理学　後楽庵主人訳補
- スマンガラ僧正ノ達摩波陀論　エ、エフ、メルケエルス稿（日本　咄堂居士訳）

寄書
- 自然の理法を論す　吉村真治
- 依頼主義ヲ放棄スヘシ　秋山銀二郎
- 耶蘇教ハ之ヲ排斥セサルヘカラス仏教ハ之ヲ改良セサル可ラス

史伝　石川台嶺師之伝

雑報　○古代欧米仏教○神智学会○青年仏教徒の海外留学○西京の仏教○小本願寺○九州仏教団○熊本の二大学校○仏教徒の大会議○両本願寺法主の授爵○異安心取調○知恩院の臨時総会○宜しく将来を瞥むべし○其心底如何○二教徒の冷熱○赤十字社○宗教全局の盛衰に注意すべし○両院議員の宗教

広告　○出版（反省会雑誌・法之園・海外仏教事情）○興教書院発売書籍○開明新報

特別社告　○特別寄書家（井上圓了・池松豐記・服部宇之吉・堀内静宇・土岐善静・戸城伝七郎・大内青巒・辰巳小次郎・東海玄虎・津田静一・南條文雄・中西牛郎・中村六蔵・中山理賢・中川小十郎・松山松太郎・藤島了穏・藤岡法真・秋山銀二郎・天野為之・佐治実然・澤柳政太郎・三宅雄二郎・平松理英・久松定弘・平井金三・鈴木券太郎）

通号2号（「國教」第2号）一八九〇（明治二三）年一〇月二五日発行

特別社告　○本誌第三号より誌面改良予告○特別寄書家（岩堀知道・小栗栖香頂・神代洞通・辻敬之・前田慧雲・藤田祐真・朝比奈知泉・志方熊記・釋宗演）

祝詞　國教の発刊を祝す　釋宗演

祝詞　祝國教発兌　池松豐記

祝詞　高見廣川

社説

論説

演説　仏教の真理を照明するは今日にあり　松山緑陰居士

翻訳　学教の一完体…咸化力

教育及び宗教　戸城伝七郎

慈恵会に就て　松山緑陰

同愛慈会に就て　赤松連城
手相学　ルイス、コットン氏稿（含翠庵水村訳）
スマンガラ僧正ノ達摩波陀論（承前）　後楽庵主人訳補
蒐録　仏教教徴照論…緒論　中西牛郎
芸苑　訪万行寺七里恒順　山田天山
偶成　池松豊記
寄書　日本主義の拡張を望む　S・Y・
雑報　耶蘇教は之を排斥せざる可らず仏教は之を改良せざる可らず（承前）　秋山銀二郎
○知恩院負債事件○曹洞宗の大紛議○文学寮の新築○各宗教信徒の統計○仏応の仏教徒○十歳以下の未亡人○殷の鑑み○軍人説教と貴婦人法話会○高等中学○井上哲次郎氏の宗教論
広告　○海外宣教会中央本部○出版（法の園・反省会雑誌・農工商雑誌・法話・仏教海外事情・真宗道徳新編）○仏教ニ対スル疑難ヲ徴集ス（生田得能）
普通社告　○教雑誌社規約○本誌講読・雑誌交換の申込方法○前号正誤

通号3号（「國教」第3号）一八九〇（明治二三）年一一月二五日発行

社説　○本誌に対する各新聞雑誌の批評の附録
論説　仏教と社会の関係　中川小十郎
宗教と教育　堀内静宇
信仰自由の誤解を論し耶蘇教徒に告く　前田慧雲
耶蘇教は父子倫を破壊する宗教なり

蒐録　仏教徴照論緒論（承前）　中西牛郎
仏教講究に関ずる井上哲次郎氏の談話　加藤熊一郎
翻訳　自然の理法を論す　メルケヱルス氏著（咄堂居士訳）
スマンガラ僧正との談話　ドグラス、フォーセット（雲軸生訳）
寄書　宗教ノ人気　黙堂居士
耶蘇教は之を排斥せざるべからず仏教は之を改良せざるべからず（承前）　秋山銀二郎
史伝　上八淵藤岡両師書　在学林　直言生
雑報　石川台嶺師の伝（承前）
○教育に関する勅語○帝国議会の開院式○嗣法主と令嬢○貴族的本山○両者何れを択ばん○月賦の支払ひ○日蓮宗の紛義○曹洞宗管長訴へらる○本願寺大学林文学寮○若し○戯会か議会か○九州倶楽部○九州仏教団○中国仏教団○豈に其人ならんや○日刊新聞発行の計画○発行と改良○或人の問に答ふ○寄贈の雑誌
広告　○出版（経世博議・大同新報・反省会雑誌・青年之標準・仏教新運動・簿記之友）○日本美術建築請負業（伊藤平左衛門）
社告　○本社正社員（住所・姓名）○本社の正社員にして維持金を投せられし人々（金額・姓名）○本社の維持金として殊に義捐金を投せられし人々（金額・住所・姓名）○國教雑誌社規約○本誌特約大売捌所

通号4号（「國教」第4号）一八九〇（明治二三）年一二月二五日発行

特別社告　○本誌一千余部増刷○明年一月発行本誌の附録予告○本誌第五号掲載論説の予告○他
社説　咄、起きよ惰懶者矣
論説　罌熊、釈迦牟尼及ヘラクリテス　文学士　服部宇之吉
真宗の為に惜む　平井金三

蒐録　仏教徴照論緒論（承前）　中西牛郎
蒙古の仏教（開明新報の転載）
翻訳　自然の理法を論ず（承前）　メルケヱルス氏著（咄堂居士訳）
寄書　寺法細則の更生案を読む　在川尻　S・S・生
間接布教論　在東京　枚田探源
耶蘇教排斥論　秋楓山人
評論　○僧侶と政党○軍人と宗教○九州倶楽部○寺法細則の更生案○オリエンタルホール○経世博議
雑報　○勅令六十九号追加○亜細亜の光輝の著作料○各宗本山の厄年○本國寺執事の罪悪露顕○本願寺集会の可決案○上首○安國清氏○本願寺総代会衆○我国の名誉と云ふべし○世界滅亡の有様○玉藻○寄贈の雑誌
社告　○本社の維持金として義捐金を投せられし人々〔金額・住所・姓名〕○本社正社員〔住所・姓名〕○正社員の維持金を領収したる分○國教雑誌社規約○本誌特約大売捌所
広告　○出版（法の雨・速記粲報・法の園・利と道・密厳教報・他）○商業協会（会員募集）○国粋主義新聞雑誌書籍無料観覧場
文庫設立趣意書

通号5号（「國教」第5号）一八九一（明治二四）年一月二五日発行

社告　○國教雑誌社規約○本誌特約大売捌所
特別社告　○本誌第六号掲載論説の予告○本誌第一・二・三・四号の再版
社説　本年最初の発刊に望み聊か所感を述ふ
論説　感応の説　姫宮大圓
余が宗教に対するの感情　中西牛郎
教理之応用　辻治之

蒐録　各国宗教一班
史伝　石川台嶺師の伝（接前）
寄書　杞憂生ノ疑ヲ解ス　生田得能
　　國教に寄す　禿充
評論　○十万の緇林中一人の具眼者なき乎○新仏教革命の先鞭○耶蘇教の末路○北垣府知事各宗高僧を論す○果して信乎○咄、何等の怪事ぞ○宜しく其収出明にすべし○経世博議
雑報　○改革党大に起らんとす○三重県下の名僧○曹洞宗管長告訴せらる○選挙権に関する陳情書○曹洞宗紛議の落着○一致教会の改革○三種の新宗教○露国に於る寺院僧侶の数○本誌附録○時事摘要
広告　○恭順新年（國教雑誌社・他）○出版（密厳教報・遍羅仏教事情・教海・行政・伝道会雑誌・伝燈・他）○支店開業広告（山本活版所）

通号6号（「國教」第6号）　一八九一（明治二四）年二月二五日発行

広告　○明治十年ノ役遺物陳列場設立趣旨○小学科僧侶教員速成○出版（東京商業雑誌・九州之文華・尊皇報仏大同団報）
社説　九州の仏教　無名生
論説　僧侶被撰挙権の請願に就て　姫宮大圓
　　感応の説（承前）　中村六蔵
　　國教記者に告ぐ　加藤熊一郎
　　印度史を読む　井上哲次郎
蒐録　欧州に於る東洋学　メルケヱルス氏
翻訳　自然の理法を論ず（承前）　麿墨体量
寄書　今日ノ僧侶ハ半ハ蛇カ

史伝　日本仏教改革の一班　開明新報社　神代洞通

評論　○死刑廃止の請願○曹洞宗有志会○高等中学不敬事件の顕末○兵役免除の請願

雑報　○大谷派の改革党○附帯の原因○細川、楠の両嗣講○中学林設立の計画○知恩院の訴訟事件○高田派本山の総管○死刑廃止の請願○兵役免除の請願○佐伯旭雅師遷化す○尊王奉仏大同団○遺物陳列場設立の計画○簡易科教員速成伝習所○真宗問答○耶蘇教徒の計画○珠連○小教校一覧表○時事摘要（自一月三日至二月三日）

広告　○出版（宗教大勢論・組織仏教論・縮刷仏教或問）

社告　○國教雑誌社規約

通号7号（「國教」第7号）一八九一（明治二四）年四月二五日発行

広告　○出版（農民）○会員募集（攻法会）

社説　至誠なき事業は継続せず　島地黙雷

論説　耶仏の二教　中西牛郎

反響　中西元治郎

宗制改革論　無名生

仏教目下の急務　秋山銀二郎

蒐録　無神論理序　中西牛郎

無神論理序　藹々居士　大内青巒

無神論理　片桐白川纂述

支那現行の宗教一班　東肥　楽天処士稿

キヤリフホーニア州に於る耶蘇教の近況　杉山生

五古一　菊池三舟
寄書　人は必らずや幾分の哲理を知らざる可らず　自由新聞社にて　白川正治
起きよ正義の君子奮へよ愛国の志士　禿充
史伝　大教主釈迦牟尼世尊の小伝
評論　○第二回仏教者大懇話会○其二○反省会○旧富岡県知事○熊本の商業家に臨む○協興学館
雑報　○第二回仏教者大懇話会○議案○各宗協会○同志倶楽部○更迭と当撰○名僧の訃報○九州倶楽部認定宿
広告　○出版（簿記之友・単式簿記整理・浄土真宗伝仏心印義）
社告　○編輯人病気のため本誌第七号発行延引○第八号より記者増聘・誌面改良予告

通号8号（「國教」第8号）一八九一（明治二四）年六月二五日発行

広告　○出版（反省会雑誌）○生徒募集特別広告（私立尽誠舎）
特別社告　○本号より誌面改良（宗教上の記事に加え世間全般の出来事を掲載）○正会員・賛成会員への滞納金納付督促
社説　露国皇太子殿下の御遭難に就き聊か所感を述ぶ　八洲蟠龍
論説　宗教取捨弁　堀内静宇
　　遏羅の仏教　織田得能
　　人とは如何なる者ぞ　福井了雄
蒐録　宗教指針序　辻治之
　　キヤリホーニヤ州に於る耶蘇教（承前）　杉山某
　　無福論理緒論（承前）　白川生
寄書　当今の青年　無名生

反省団開拓の趣旨　吉丸徹太郎
評論　○日本仏教徒に訴ふ○藤島了穏氏○熊本県下の実業家に勧告す○湖南事　吉村真治
件○其二
雑報　○内閣大臣の更迭○全国教育連合会○一は収め一は奪はる○曹洞宗臨時宗会○忠愛新報○蛟龍再び雲を得たり○追吊会○死する者十二人○津田三蔵の処刑○内務省訓令○各国教育費の程度○六百五十万円○慰労及寄附○不釣合の裁判○支那の一揆○暴動の目的○蜂起の場所○御注意○コツポ液○多く茄子の実を得る法○洗濯の材料○鳥目○是れでこそ○収入○発明○逝去○入寂○帯留○提出○辞職○入費○遷化○賑合○和魂○寮長○就職○仏祭○熊本○停止○収入○終結○電灯○送達○失敗○焼失○上申○正誤
広告　○出版（真誌・尊皇奉仏大同団団報・心・法の園・海外仏教事情）
社告　○國教雑誌社規約

通号9号（「第二國教」第1号）一八九一（明治二四）年一〇月一〇日発行

特別社告　○注意社告（本誌逓信省認可なきため郵送に二銭切手貼付必要）○社告（本誌京都印刷から本社印刷に変更・交換雑誌は本社宛送付のこと）
広告　○出版（教友雑誌・仏教・仏教新運動・真宗仮名聖教）○熊本帰郷（吉村真治）○復籍（西寺事、藤院大誓）○印刻師温古堂
第二國教　第二國教発刊に就て　編輯者誌
仏教の新気運　八淵蟠龍
論説　宗教取捨弁（承前）　堀内静宇
今日の仏教徒は宜しく進んで植民事業に従事すべし　中西元次郎
法海　○行誠上人の法語○一遍上人の法語○中将姫の箴言（和論語）○古徳詠歌集

雑録　中西牛郎氏対徳富猪一郎氏　加藤咄堂
累七弁（八淵所蔵ノ一）
朝鮮釜山港通信　安養寺圓晉
無神論（承前）　片桐白川纂訳
仏門各種の統計
寄書　法の罪に非す器の罪なり　不得止庵主人
至上の快楽　在東京　武田興國
仏教盛衰ノ主因　村岡朝太郎
雑報　○印度仏跡興復会○印度仏跡興復会創立之趣意○阿刀宥浄氏○改革党大会の詳報○改革要旨と請願規約○顕光会○本願寺法主猊下○北畠大学○日蓮宗管長の処刑○神智学会長○御下賜○大谷派本願寺に対する訴訟○真宗仮名聖教
○大谷派本願寺の改革党○曹洞宗及日蓮宗○内務大臣の訓示　吉村真治
評論　○九州仏教軍○正法輪
批評　○自廿四年一月至九月三十日（経世博議、他）
寄贈雑誌　○出版（密厳教報・能仁新報・海外仏教事情・法之雨）
広告　○國教雑誌改正規約
普通社告
通号10号（「第二國教」第2号）一八九一（明治二四）年一一月二〇日発行
特別社告　○十二月より本誌月二回発行、誌面改良等の予告
社告　○愛知岐阜両県の震災に付救恤義捐を仏門同胞兄弟に告白す
広告　○愛知岐阜両県下の震災に就て全国慈善家に哀告す（仏教婦人会中央部・法雨協会本部）○出版（華之園）

社説　第二國教の精神
論説　尾濃の戦に基督教奇兵を用て仏教の大群に敵す　中西牛郎
　　オルゴツト氏　草野本晢
演説　仏教徒衛生の注意　八淵蟠龍演説
蒐録　体質考定（スプルツアイム氏著書翻訳）
　　東西大関相撲五組
　　七大宗の教義比較表
寄書　オルゴツト氏の要求烈火の如し　中西牛郎
　　猛省せよ全国の仏徒　狂仏居士
　　宣教家布教の方便　秋山銀二郎
監獄教報　監獄教報九州各県監獄教誨師の集会
詞叢　○詩八首（菊池三舟居士）○詩三首（新道迂蹊）○詩三首（加藤竹翁）
雑報　○皇太子陛下の行啓○比丘尼方の御陪食○久迩宮朝彦親王殿下の薨去○両本願寺へ御下賜の袈裟○築地本願寺の扁額○仏教図書館の設立○印度仏蹟復興会○仏教徒の記章を作る○開進学校の栄誉○寺院境内に課税を要す○北海道の布教○基督教的学校の前途○基督教は男尊女卑○ニコライ氏○法住教会の義捐金募集○震災に関する彙報
　　老年僧侶…青年僧侶
時評　○温古堂印房○出版（誠第・法之雨）
広告　○國教雑誌改正規約
普通社告

通号11号（「第二國教」第3号）一八九一（明治二四）年一二月一七日発行

社告　○國教雑誌規則摘要
社説　東洋地震説　八淵蟠龍
論説　僧侶の濫造を防くべし　九州日日新聞社員　天狂生
仏教社会に対する希望　忠愛新報社　奥山千代松
劣情の夢　中西元治郎
寃録　臨済寺の復翰
思い出のまにまに（其一）
無神論理（第一号の続）　片桐白川篇訳
仏教学校ニ望ム所アリ　吉村蛾堂（蛾堂居士）
寄書　震災地方に於る仏徒の責任及興復の方針　草野本晢
天王山上に旌旗を飜すものは果たして何人そ　望見生
基督教徒に謝し。併せて其教の衰頽に就くを吊ふ　今村雲峯
監獄教報　九州各県監獄教誨師集会提出問題
詞叢　○爲報恩賦七言古（菊池寛容）○寄第二國教詩二首（大友達行）○詩三首（菊池三舟）○空也上人売笊図賛及詩五首（草野紫州）○詩一首（鷹枝白水）○詩一首（赤星実明）○詩一首（新道迂溪）○詩二首（禿充）○曹洞宗鎮西中学林祝詞（松平正直）○同（茨木惟昭）○鎮西中学林ノ設立ヲ祝ス（津田静一）○鎮西曹洞中学林ノ開林ヲ祝ス（平井正衛）○祝詞（杉村大八）
雑報　○皇后陛下の御仁徳○久迩宮殿下の御閲歴○オ氏国に帰る○兵役免除に就て○九州学院○鎮西中学林○大派改革党の挙動○協同伝道会組織成る○朴氏切りに仏学を修む○基督教徒十誡の修正○震災に関する彙報

批評　基督教贖罪論　安田真月
社告　○編輯者解任（吉村真治）○辱知諸君に告ぐ（旧國教編輯者吉村真治）○注意…社告（本誌改良の実施・新年初刊の付録・本誌発行の延期・雑誌代金及広告）○愛知岐阜両県の震災に付救恤義捐を仏門同胞兄弟に告白す
広告　○愛知岐阜両県下の震災に就て全国慈善家に哀告す（仏教婦人会中央部・法雨協会本部）

通号12号（「第二國教」第4号）一八九一（明治二四）年一二月三〇日発行

社告　○國教雑誌規則摘要
特別社告　○本誌配達上の事につき○新年の付録○義捐金報告
社説　仏教の新聞雑誌を連合同盟するは教界の急務
東洋地震説（承前）　八淵蟠龍
論説　仏教社会に対する希望（承前）　八淵蟠龍
蒐録　唐三蔵義浄師略伝及八坂談話　忠愛新報社　奥山千代松
無神論理（承前）　日本　真宗　阿満得聞
思出のまにまに（其二）　片桐白川篇訳
詞叢　○闢邪教策及詩五首（草野本晳）○詩六首（井上昆江）○詩七首（鷹枝大観）○詩五首（草野紫州）○詩二首（迦統慈雲）○詩一首（土田黙庵）○歌一首（井口素行）　なつき
批評　○何ぞ奮つて狐独の救済を図らざる○仏教社会亦将に眠りに就んとす○吾人は其心事を解するに苦しむ○児戯乎将た狂言乎○憐れむべし同志社の衰運○弁舌と文章　狂仏居士
雑報　○此任に当る者は何人ぞ
驚くべし宗教の感化○福田会孤児を引取る○孤児の救養を計らんとす○仏教病院○教友会○巴里の仏教○外国婦人仏教に帰

依す○耶仏青年会の競争○仏教社会何ぞ夫れ廢事の多きや○管長交替○日蓮宗の法将逝く○浄土宗宗務執事の辞職○京都新聞発行の計画○延寿寺の本堂再建○一片の紙葉法華経八巻を写す○注意すべきは外教徒の慈善なり○正誤

寄書　托鉢説　菊地寛容

仏教の盛運と僧侶の敗徳　禿充

広告　○震災義捐金報告○出版（大悲之友・仏教新運動付録・法之雨）

通号13号（「第二國教」第5号）一八九二（明治二五）年一月発行カ　欠本

通号14号（「第二國教」第6号）一八九二（明治二五）年二月五日発行

社告　○國教雑誌規則摘要

社説　活仏教　草野本晢

論説　新仏教論　石川望洋

地震微考　勝國道人

演説　仏教大意　島地黙雷

寄書　我国宗教上に於ける九州の形勢を論す（承前）　森直樹

蒐録　本願寺広如宗主誡時衆偈　故日溪法霖

対食偈　文学博士　井上哲次郎

王陽明学　谷口藍田撰

昆江井上先生墓誌銘　片桐白川訳

無神論理（承前）

詞叢　○詩一首（荻野独園）○詩一首（調雲集）○詩一首（故井上昆江）○詩一首（不二門静湖）○詩一首（小栗栖栞処）○詩二首（菊地寛容）○詩一首（草野本晢）○詩二首（松林法雷）○詩一首（龍華空音）○詩一首（小野木善親）○詩一首（草折言）○詩一首（高木米所）○詩五首（波多野彦也）○詩一首（樋口唯晢）○詩一首（瑞穂秋帆）○詩一首（今村雲峰）○諧句四首（晴雲庵古池花鸚）○歌一首（大城晢三）○歌二首（菊地千枝子）

時事　熊本英学校の罪を鳴らして同胞正義の士に訴ふ（熊本英学校の違勅演説）慨世義団

雑報　熊本英学校の事に付て有志諸君に質す（熊本英学校の違勅演説）　大島搏

○釈尊霊蹟のパノラマ図○総合哲学講義○京都仏教徒の新年懇親会○副嶋老伯の持念仏○泉涌寺へ諭達○山階宮殿下推戴を辞させ給ふ○竹村藤兵衛氏○狸の法衣○驚く可き一大怪報○今北洪川禅師の入寂○震災地の孤児収養○曹洞宗中学林耶蘇教師を招く○北畠道龍師○第二の玄奘三蔵○禿安慧氏の名誉○中村弥六氏の膽気○西合志の仏教大演説会

広告　○出版（四明余霞・経世博議）○有朋社広告

通号15号（「國教」第7号）一八九二（明治二五）年二月二九日発行

社告　○國教雑誌規則摘要

社説　第二國教改題の趣旨及び将来の希望

論説　井上圓了氏と中西牛郎氏を対照論評す（第一）　森直樹

仏海波瀾　新仏教論に就て中西氏と鎌田氏との大論戦　中西牛郎・鎌田淵海

詞叢　○長嶺山順正寺銅鐘銘・題孟母断機図（清浦奎吾）○孤独吟・次秋帆老人韻（菊池寛容）○詩一首（松林法雷）○詩二首（草野折言）○詩一首（中瀬秀二郎）○詩一首（高木米所）○詩二首（波多野彦也）○詩一首（水月仲丸）○詩一首（樋口珠南）○詩一首（新道迂溪）○詩一首（折言狂生）

雑報　新仏教論に就て大激論○仏教徒中央亜細亜に探険を試みんとす○日蓮宗大懇親会○延暦寺の修繕漸く成る○一種奇妙の仏教信者照明広告○荻野独園禅師の近詠○心中の乱髪○文学寮新築の近況○藤宮規平氏の蜃気楼○仏界運動の新光輝○仏光将さ

に桑港に輝かんとす○大久保含海師の名代○耶蘇教徒伝道の二大策○耶蘇教徒名古屋に孤児院を設立す○東京府下基督教の教勢○福澤翁の米搗

広告　○中西牛郎著書（宗教革命論・組織仏教論・宗教大勢論・仏教大意・新仏教論）○出版（伝道会雑誌）

通号16号（「國教」第8号）一八九二（明治二五）年三月二五日発行

社告　○國教雑誌規則摘要

社説　耶蘇教と戦ふ可きは斯時に在り

論説　井上圓了氏と中西牛郎氏を対照論評す（第二）　森直樹

寄書　鎌田淵海師の暴激論　狂新生

改革　秋山銀二郎

経済的眼光を以て僧族諸公に一策を呈す　紫陽　嶋宗平

演説　文学博士　小中村清矩

古代宗教論

詞叢　○詩一首（調雲集）○詩一首（小栗憲一）○詩二首（草野本晢）○詩二首（山本松稜逸）○詩二首（今村大膳）○歌三首（鹿枝大観）○歌三首（長嶺圓子）○歌三首（菊池千枝子）○歌一首（柳堂秀雄）

雑報　○京都に於ける仏教学生の弊習○其弊習とは何ぞや○其弊習の原因○肥後の仏教学生○久米邦武氏奇禍を招く○神道家の大激昂○神道家の新議論○神道は宗教なるか国典なるか○今年の四月八日○唐津各宗協同会○中西牛郎氏○鎌田淵海師○興学会起れり○仏教公論○熊本総組長の更迭

広告　○出版（経世博議・仏教新運動・法之雨）○中西牛郎著書（宗教革命論・組織仏教論・宗教大勢論・新仏教論）

通号17号（「國教」第17号）一八九二（明治二五）年　発行月日不明（欠本）

通号18号（「國教」第18号）一八九二（明治二五）年一二月二〇日発行
社告　○國教愛読者に急告す○國教雑誌規則摘要
社説　明治二十五年の歳晩に臨み満腔の感慨を迸洩す　黙々居士
論説　印度仏陀伽耶回復に就て九州仏教徒に檄す（接続）　森直樹
寄書　道理上宗教的儀式ノ必要　在東京　橘大安
現時僧侶ニ要スル所ノモノ　在東京　桜雨生
蒐録　近世仏教史の新現象西蔵国との連合（前号接続）　堀内静宇
西蔵及び此摩羅耶以南仏教徒の重要なる会合（前号接続）　外山義丈
故法勝寺執行俊寛僧都紀念塔銘　平安　菊池純識
雑報　○中山二位局仏教に帰し給ふ○故久迩宮殿下の御一周忌○海江田将軍受戒す○山田顕義伯の仏葬○大谷派法主を大菩提会副会長に仰がんとす○ダンマパラ氏の書簡○島地黙雷師の大奮発○藤嶋了穏師も同行せんとす○勝友会員の美挙○世界的仏教気運の刺戟○大谷派本堂上棟式○大谷派三法主猊下の親論○南禅寺派琉球に開教せんとす○日蓮宗大会議○真言宗宗会の解散○「教海指針」の流涕大息○宮本恵順師の述懐○本派会衆中の二猛将○仏教大難論愈々出でたり○「國教」の寸評○本年一月以來寄贈の雑誌及び小冊子
広告　○宗祖埋骨ノ地ヲトス（青木連城）○出版（教界万報・仏教公論・同学・能仁新報・仏教大難論・反省雑誌）○朝鮮飴

通号19号（「國教」第19号）一八九三（明治二六）年一月二五日発行
社告　○謹祝新陽○國教雑誌規則摘要
社説　明治二十六年の新陽を迎ゆ
論説　「ブッヂス、トレー」の余の文を評せるを評す　在帝国大学　古河老川
印度仏陀伽耶回復に就て九州仏教徒に檄す（接続）　森直樹

寄書　万国宗教大会ニ就テ　京都　月輪正遵
二十世紀以後ニ於ケル宗教ノ大勢ヲトス　和泉司
演説　欧米東洋学流行の一斑を述べて東洋専門大学設立の必要を論ず　井上圓了
蒐録　愚迷発心集（十七号接続）　解脱上人
仏教大難論自序　中西牛郎
人世　古河老川
小説　花の露　旭松山人
雑報　真宗興隆縁起を献納す○後七日の御修法○北白川宮殿下○仏教徒の錦の御旗○大谷派法主大菩提会の懇請を辞す○近藤是苗師の印度漫遊○清国墨禅和尚の帰国○印度錫蘭仏徒の建白書再び○英文仏教小冊子施配の計画○井上圓了氏○井上圓了氏の大演説会
広告　○謹賀新年（社主八淵蟠龍、他）○出版（法話・反省雑誌・仏教公論・経世博議・他）○大蔵経欠本買入（菊池寛容）○薬品（複方吐根散・しもやけ根薬・肺病丸・清聴液）○朝鮮飴

通号20号（「國教」第20号）一八九三（明治二六）年三月三〇日発行

社告　○巻頭言○國教雑誌規則摘要
社説　万国宗教大会議に就て各宗協会に望む　在大坂　中西牛郎
仏教道徳の真義を論ず
〔折込〕　間接的仏教伝道部創立之趣旨
論説　拝詔余七言　島地黙雷
特別寄書　教育と宗教の衝突　文学博士　井上哲次郎
寄書　基督教徒将さに火中に飛び入らんとす　甲斐方策

雑報　○釋宗演師世界的運動の計画○普恩天寿氏日本に来る○普恩天寿氏の各地に於ける演説○シカゴに於ける日本の評判○稲村英隆師印度仏蹟に詣せんとす○亜細亜之光輝独乙文に訳せらる○邏羅に於ける仏書の編纂○印度大菩提会の報告○仏陀の讃美歌○英訳四十二章経の配付○香港より日本僧侶の派遣を望む○英国に於ける新仏教書の編纂○釋宗演師渡米費勧募主意書○蔵原惟郭氏と海老名弾正氏
広告　○彰教書院発売書籍○特別寄書家（杉浦重剛・西松二郎・菅虎雄・今井常郎）○出版（宝の林・貴族真蹟・他）

通号21号（「國教」第21号）　一八九三（明治二六）年四月三〇日発行

社告　○巻頭言○國教雑誌規則摘要
社説　日本仏教の運動と四囲境遇の変遷　默々居士
仏教道徳の真義を論ず（接続）　在大坂　中西牛郎
論説　厭世教の必要　文学士　井上圓了
仏教盛衰の本源　在京都　西保太郎
特別寄書　教育と宗教の衝突（接続）　文学博士　井上哲次郎
万国宗教大会参列陳情書　蘆津実全
寄書　基督教将さに火中に飛び入らんとす（接続）　甲斐方策
小説　花の露（十九号の続き）　東京　旭松山人
雑報　教祖大聖釈尊の降誕会○釈尊降誕会の光景○又同日○九州仏教の有志者世界的運動の檄文を発す○八淵蟠龍師を万国宗教大会に派遣するに就て九州仏教徒に訴ふ○蘆津実全師の世界的運動○印度仏教蹟参拝僧の送別会○稲村英隆僧正の印度に赴くを送る○日蓮宗々務院の世界的奮発○万国宗教大会に対する日本各宗の挙動○熊本の雑誌流行○熊本雑誌の批評○第一『九州文学』○第二『九州教育雑誌』○第三『九州人』○第四『龍南会雑誌』○第五『錦溪』○第六『文林余芳』
広告　○出版（仏教通信講義録・少年の仏教・花園の蛇・仏教公論）○第一回農産品評会○大日本仏教軍規約

通号22号（「國教」第22号）一八九三（明治二六）年六月七日発行

社説　日本仏教徒と世界的観念　黙々居士
論説　東洋仏教の歴史的観察　在大坂　中西牛郎
仏界の理想と現実　在京都　松山緑陰
特別寄書　教育と宗教の衝突（接続）　文学博士　井上哲次郎
空想を実行せよ　釋宗演
寄書　基督教徒将さに火中に飛び入らんとす（完結）　甲斐方策
将に印度に赴かんとして　釋守愚
小説　花の露（上の下）　東京　旭松山人
雑報　○稲村英隆僧正愈々渡天す○日本仏界惟一遠征者の事蹟○新仏教徒が最も注目す可き大問題○教育と宗教の衝突に関する耶蘇教徒の狼狽○高橋五郎氏の罵倒的乱撃○国民之友の評殺的乱撃○曲学阿世の僻論○井上哲次郎氏の感慨○八淵蟠龍師万国宗教大会の助言委員に任ぜらる○松山緑陰君の世界的間接運動○京都新報の跼内的頑迷
緊急広告　○八淵蟠龍万国宗教大会臨席（九州仏教同盟会本部）○万国宗教大会代表者派遣の義捐金報告を本誌号外に掲載（万国宗教大会代表者派遣事務所）
社告　○國教雑誌規則摘要

通号23号（「國教」第23号）一八九三（明治二六）年六月三〇日発行

特別社告　○万国宗教大会報道掲載予告
特別広告　○八淵蟠龍万国宗教大会臨席（九州仏教同盟会本部）○万国宗教大会代表者派遣の義捐金報告を本誌号外に掲載（万国宗教大会代表者派遣事務所）
社説　万国宗教大会臨席者八淵蟠龍師を送る　大道憲信

論説　印度苦学中の感懐（上）　釋宗演
東洋仏教の歴史的観察（接続）　在大坂　中西牛郎
特別寄書　教育と宗教の衝突（完結）　文学博士　井上哲次郎
寄書　日本国家と仏教の関係を論じて海内の同胞に訴ふ　玉名　吉弘新太郎
宗教の前途を卜す　福岡　松村森吉
詞叢　八淵師の万里遠征を送る　甲斐方策
八淵蟠龍師の渡米を送る　本山知英
八淵師の雄図を餞す　山田安間
八淵蟠龍師の壮挙を送る　菊地適
詩〇送八淵蟠龍氏赴万国宗教大会（粟津瀬渓）〇同一首（青香彫）
歌〇八淵蟠氏の米国行を送る（軌蔵居士）〇同一首（橋本麒一）〇同一首（林稚枝）〇同一首（黒田親明）〇同二首（吉弘正臣）〇同一首（伊佐次太）〇同一首（本郷廣太）〇同一首（山田亀喜）〇同一首（廣瀬高）
詩〇渡海五首寄國教記者（蔭津実全）〇寄國教社（斎田耕夫）
雑報　〇万国宗教大会臨席者八淵蟠龍師の送別会〇第一八淵師の経歴に対する吾人の所感〇第二同志青年特別送別会〇第三八淵蟠龍師渡米送別会〇第四送八淵蟠龍師之万里遠征〇第五八淵蟠龍愈々熊城を発す〇第六高瀬停車場に於ける送別会〇第七八淵氏門司出帆後の順序〇教育宗教衝突問題の波瀾〇古河老川君の頑迷仏徒瞥醒〇東西両派の名師米国耶蘇教徒の軽蔑的蹂躙を蒙る〇鎖国的偽新仏教家の真特色
〇尾上南鎧死亡〇第二回夏期講習会開設之予告〇出版（真教・日本の光）
広告
社告　〇國教雑誌規則摘要、他

通号24号（「國教」第24号）　一八九三（明治二六）年八月五日発行

特別広告　〇万国宗教大会臨席のため出航・大会報道掲載予告（八淵蟠龍）〇本社移転広告

特別社告　○万国宗教大会報道掲載予告
社説　九州仏教徒の夏期講習会　森直樹
論説　東洋仏教の歴史的観察（完結）　在大坂　中西牛郎
理想的新天地の開拓　甲斐方策
特別寄書　日本ニ於ケル宗教問題　在米国　平井龍華
寄書　宗教大会に就て所感　中西牛郎
来れ新仏教青年（九州夏期講習会の開設）　甲斐方策
日本国家と仏教の関係を論じて海内の同胞に訴ふ（接続）　玉名　吉弘新太郎
小説　花の露（中の上）　東京　旭松山人
詞叢　詩○送八淵蟠龍師之米国（雨堂痩士）○送八淵師臨万国宗教大会（平野竹渓）○送八淵師西教館主之米洲（井手素行）
歌○八淵師の市俄高に赴かるゝを送る二首（山本李園生）
雑報　万国宗教大会臨席者○大会臨席者打合会と大送別会○宗教大会に対する英文仏書の配附○大乗仏教大意翻訳の模様○九州夏期講習○九州夏期講習出席の案内状○稲村英隆僧正歸朝す○加藤恵証師の西比利亞行○西京共楽館に於ける加藤八淵両師の送別会○教育宗衝突断案○忠孝活論
広告　○出版（仏耶決戦・冠註御文章・教育宗教衝突断案・忠孝活論）○夏期講習会開催○尾上南鎧死亡
社告　○國教雑誌規則摘要

通号25号（「國教」第25号）　一八九三（明治二六）年八月三〇日発行

特別社告　○万国宗教大会報道掲載予告
広告　○出版広告（世界三聖論）

社説　対外的新運動と跼内的旧蠢動　釋宗演
論説　印度苦学中の感懐（下）　在京都　阿満得聞
特別寄書　難易二道及聖浄二門略要　在米国　平井龍華
日本ニ於ケル宗教思想（完結）　東京　旭松山人
小説　花の露（中の下）　在北海道　嶋紫陽
寄書　北海道における人心開拓　在比叡山　林豊水隠士
万国宗教大会の結果を夢む　三浦梧棲
演説　高野山大学林学生に告ぐ　文学士　釋柳政太郎
渡米仏教家諸君を送る　土宜法龍
将さに日本を発せんとして
雑報　東京に於ける万国宗教大会臨席者の送別会○世界的仏教の運動者愈々日本を発す○二週間の九州仏教夏期講習会○第一其発会式○第二其来会者○第三其講習会○第四其質問会○第五其懇親会○第六其演説会○第七其閉会式○鎌倉二見に於ける夏期講習会○神道家も亦た万国宗教大会に臨む○耶蘇教徒も亦た宗教大会に向かはんとす○九州文学記者の歓声○土宜法龍師の光栄○島地黙雷師の遺憾状
広告　○出版（万国宗教大会議・蓮如上人縁起恵の燈・通俗安心決定鈔鼓吹・妙好人伝）
社告　○國教雑誌規則摘要

通号26号（『國教』第26号）一八九三（明治二六）年九月三〇日発行

広告　○万国宗教大会議派遣の社主八淵蟠龍の第一回報道を本号掲載、以後毎号連載○出版広告（万国宗教大会議・耶蘇教の危機）
社説　中西牛郎氏の二大論と一断案

論説　大乗仏教論　在米宗教大会　蘆津実全
仏教徒夏期講習会を論ず　在帝国大学　古河老川
詞叢　亡友清水吉太郎を哭す　森直樹
小説　花の露（下の上）　東京　旭松山人
万国宗教大会　遙に英領瓦港より九州の同志青年に寄す　在米宗教大会　八淵蟠龍
万国宗教大会臨席道中記○ジヤパン号日本を発す○ジヤパン号は堅牢なり○船客船室支那ボーイ○同船日本人の諸人物○支那人琴を弾ず○十三昼夜の航路格別憂鬱を感ぜず○一芸を修めて語学文章に熟達せざる可らず○上等室の船客女尊男卑の陋習○船内食堂の景状郷に入りては郷に従ふ○食物の種類船中の文明人便所に入りて手を洗はず○太平洋上雲耶山耶の活詩を望む○日本の盛暑八月白雪皚々の中を行く○愈々移民教導の必要を感ず○洪嶽石蓮雲外三師の雄吟麗賦○熊本県人渡邊隆其禍難を救はる○支那人の下等室恰も穢多乞食の如し○錫蘭人色黒く体大なり○雑事四件○航海中重複の日世界要所時間の比較○八月二十一日午後十時市俄高に着す○衣食を抵当にして青年を育つ可し○万国宗教大会顚末報告書○大会閉場後釋蘆士三師の方針○小衲帰朝の期　八淵蟠龍
広告　○彰教書院発売書籍○出版（仏教通俗講義・能仁新報・倶舎論翼一・仏教講義録・唯識三十頌錦花・法話・蓮如上人縁起恵の燈・通俗安心決定鈔鼓吹・妙好人伝）○日本農民会緊急広告
附録　万国宗教大会代表者派遣義捐金報告（住所・金額・姓名）
社告　○國教雑誌規則摘要

通号27号（「國教」第27号）　一八九三（明治二六）年一一月六日発行
特別社告　○本誌代金延滞金取立
社説　西本願寺の総代議会
中西牛郎氏の二大論と一断案（接続）
論説　仏教青年会及び婦人会に就て　甲斐方策
大乗仏教論（接続）　在米宗教大会　蘆津実全
小説　花の露（下の中）　在東京　旭松山人
万国宗教大会　◎万国宗教大会開会式の光景○『閣龍館裏万邦会。自是無軍旗戦鼓』とは○開会日猶ほ浅き亞米利加の新自由国に向かつて来会せり○流石に広き閣龍館も全く人を以て充たされたり○劉喨たる唱歌を以て開会の式を開かる○時は愈々十時となれり○会長ボンネー氏歓迎の演説○委員長バルロー氏万国宗教大会の必要を論ず○錫蘭仏教の代表者ダンマパーラ氏仏教の慈悲寛容を演ず○日本神道の代表者柴田氏祝辞を朗読す○日本仏教代表者の挨拶○大会第二日の演説者○大会第三日の演説者○大会第四日○宗教大会に対する各教者の動静○原心猛師宗教大会に寄するの書○盧津実全師帰朝の途に上る○日蓮宗大石寺沙門の狂乱状○右狂乱状に対する土宜法龍師の駁撃書○右狂乱書に対する八淵蟠龍師の書簡○日本耶蘇教の代表者小崎弘道氏の論文○米国耶蘇教徒宗教談に畏縮す○博覧会内日本喫茶店の説教○シカゴ府内耶蘇教寺院の数○土宜法龍師『朝日輝く瑞穂国』の英詩を受く○八淵蟠龍師帰朝す○ダンマパーラ氏来朝せんとす
雑報　○京都新報巧言令色の邀会衆諸師文○熊本に於ける宗教の奇現象○新仏教青年の夭落○廣海枳堂氏の遠征行○長洲町暴風遭難漁夫の惨状悲況
広告　○出版（伝燈・四明余霞・大乗仏教問答）○東京自由神学校生徒募集○上京（甲斐方策）
社告　○國教雑誌規則摘要
通号28号（「國教」第28号）　一八九三（明治二六）年一二月七日発行
特別社告　○本誌代金延滞金払込願○本誌万国宗教大会欄広告

社説　大会臨席者帰る今後の運動如何　万国宗教大会臨席者　蔭津実全
革新的仏教中央機関発行の最大急務
論説　大乗仏教論（完結）
小説　花の露（下の下）　在東京　旭松山人
万国宗教大会　大会帰朝後第一回報道　在東京　八淵蟠龍
宗教大会十日間の演説者　社友　受楽院普行
日本と基督教の関係（大会演説）　平井金三
日本の仏教（大会演説）　土宜法龍
儒教一斑（大会演説）　薫泉芳
仏教の要旨幷に因果法（大会演説）　釋宗演
仏陀（大会演説）　蔭津実全
万国宗教大会閉会の祝辞（大会朗読）　八淵蟠龍（平井金三訳読）
雑報　○万国宗教大会臨席者帰朝○印度仏蹟回復の主唱者来朝○釋宗演師歓迎会○横浜に於ける万国宗教大会報道会○第一高等中学に於ける八淵師の演説○東京に於ける大会報道大演説会○十五日大演説会の景況○十六日大演説会の景況○鹿鳴館に於ける八淵師の演説○禿真子の八淵師歓迎文
広告　○出版（妖怪学講義録・反省雑誌・密厳教報）
社告　○國教雑誌規則摘要

通号29号（「國教」第29号）一八九三（明治二六）年一二月三〇日発行

広告　○本誌万国宗教大会欄広告○出版広告（国家的大問題雑居非雑居）
社説　米国市俄高宗教大会の影響を論ず　中西牛郎

社説　明治二十六年の仏界を回顧す　黙々居士
論説　米国文明論　東京　C・N・生
万国宗教大会　大会帰朝後第二回報道　在西京　八淵蟠龍
雑報　◎ダンマパーラ氏第二回日本誘説の活歴史○第一横浜仏教青年会の演説○第二東京明教社員と対話○第三経済協会の席上演説○第四東京及び東海道地方の誘説○第五京都新報社の慷慨談○第六知恩院千畳敷の仏蹟興復演説○第七氏の帰国◎曹洞宗の騒動愈々大騒動○迷界一凡夫の厳命○分離派の激昂○行政官の処分政権の力を後援としたる曹洞宗事務取扱の普達、辞令、申告、訓示、示達○分離派渠魁の僧籍剝奪宗門摈斥○曹洞宗に関ずる質問書衆議院に顕はる○当路者中傷的の檄分配附○雑駁なる諸演説家網羅の内務省攻撃演説会○明教新誌と石川素童師との縦横乱撃○大騒動熱度沸騰点の徴候◎近江園城寺聖道僧風壊頽の紛擾◎盧津石蓮師『閻龍世界博覧会』を吟ず◎土宜法龍師の消息◎海外宣教会の英訳仏書施本部数◎釋興然師の釈迦正風会◎浄土宗布哇宣教会◎日蓮宗海外布教会◎伝道新誌の対外的大奮発◎コニテリアン弘道会の投機的陰険手段
附録　○第二回万国宗教大会代表者派遣義捐金報告（住所・金額・姓名）
広告　○出版（法之雨・伝道新誌・九州教育雑誌）
社告　○國教雑誌規則摘要

通号30号（『國教』第30号）　一八九四（明治二七）年四月二七日発行

社説　○九州仏教同盟会員諸君に告く（八淵蟠龍）○病気全快拝告（森直樹）
論説　欧米社会の観察（黄白両人種の衝突期と仏耶二大教の決戦代）　八淵蟠龍
主人の怠慢猾奴の専横　東京　甲斐方策
米国文明論（接続）　東京　C・N・生
万国宗教大会　大会帰朝後第三回報道　八淵蟠龍

論説　日蓮宗教義大意　故　新居日薩

雑報　○大婚二十五年御祝典○世界に於ける仏陀伽耶恢復の勢○仏京巴里に於ける真言宗の法会○西都に於ける八淵蟠龍師の光焔○本派大法主猊下の親言○本派の宿老執行八淵師の談話を聞く○知恩院千畳敷の大演説○中村楼及び伏見の演説○文学寮講堂の大演説○第三高等中学の仏耶両教青年会○八淵師同校仏教青年会に臨む○八淵師び東上す○中西氏の仏教東漸史○仏教西漸の端緒海外伝道の一番乗○大谷派老法主の葬儀○其葬儀に関する二異評○東京各学校仏教青年連合大会○東京真宗青年会○懐疑時代来れり○仏界近来の弊風○伝道新誌の自惚的反評

広告　○出版（我行く道・説教録三篇）○東温譲君追弔法会○医術開業

社告　○國教雑誌規則摘要

通号31号（「國教」第31号）一八九四（明治二七）年六月一一日発行

○特別社告（鴫宗平寄附）○第三回仏教青年会夏期講習会に付謹んで浄財の寄付を高僧信士に乞ふ（東京京都諸学校在宇学仏教青年連合会）

凱旋記念

◎万国宗教大会凱旋者八淵蟠龍師の歓迎会

凱旋偉人歓迎の準備○沿道輝し得たり凱旋の昔○本山河原凱旋偉人の歓迎式　平野掴網

歓迎八淵蟠龍師　森直樹

万国宗教大会凱旋者八淵蟠龍師を歓迎す　八淵蟠龍

一万の歓迎軍に対する答辞

熊本産新聞の凱旋人歓迎雑報（九州日々新聞・九州自由新聞・熊本新聞）

◎一日支店の特別歓迎会

八淵蟠龍師の帰熊を祝す　大倉東洋

万国宗教大会の凱旋者火洲八淵師を歓迎す　甲斐方策

八淵偉人の帰熊を歓迎す　菊池適
八淵将軍を歓迎し序に同志諸君に告ぐ　山田安間
茲ニ万国宗教大会臨席者火洲八淵蟠龍師ノ歓迎式ニ臨ンデ聊カ微衷ヲ述ブ　熊谷観念
九州仏界の偉人を迎ゆ　金子恵教
八淵蟠龍師を迎ふ　水上四辻
謹んで偉人の帰熊を迎ゆ　本山知英
八淵蟠龍老師歓迎　菊池寛容
嗚呼嗚呼実に嗚呼　篠方典
◎東雲座の報道大演説会
◎万国宗教大会の現況及観察　八淵蟠龍演説（國教編者筆記）
◎八淵蟠龍師の演説を評す　森半仏
○医術開業○出版（少年園）○印章彫刻（温古堂印房）○印刷局御製造朱肉（長崎次郎支店）
○國教雑誌規則摘要
広告
社告

雑誌「九州仏教軍」総目次

「九州仏教軍」第1号　一八九一（明治二四）年七月一五日発行

稟告		
祝詞	九州仏教軍の発刊を祝す	佐々木抑堂
祝詞	九州仏教軍の首途を祝す	藤岡法真
祝詞		真宗伝道会員総代　牧野大蓮敬白
祝詞		佐々木諦成
祝詞	九州仏教軍の発途を祝す	佐々木雲嶺
祝詞		松島善海
祝詞		伊勢　択善会記者　藤教証
祝詞		松山松太郎
電報		北豊産士　手島春治
電報		相浦完良
電報		在印度　ヒガシオンジョウ
電報		カワカミテイシン
祝詞		在上海　ナカシマサイシ
祝詞		源達源
祝詞		立花活道
祝詞		秦法励

祝詞　大在芳達
会説
九州仏教倶楽部之趣意書
論説
上仏教各宗管長書
仏教研究者に告ぐ　筑紫生
僧侶の気象を論じ併せて之を高潔ならしむる方法を示す　武田篤初
法話
九州仏教倶楽部例月法話会に於て　前田慧雲
寄書
支那宗教一班　斎藤聞精（筆記者　九州倶楽部筆記係）
欧州行日誌　肥後山人　井出三郎（素行）
国民之友第百十八号浮田和民氏の人生の目的を評す　善連法彦
訪半僧居士席上賦呈　安田格
蒐録
念仏唱和篇　晩翠軒主人
同次韻　七十一翁　西秋谷
念仏篇　松島南溟
余将申上海赴漢口賦七言古一篇以告別於馮氏　白香山
燕涼述懐寄法友某　井出素行
孤孀子　井出素行
本部報告
○九州仏教倶楽部規則○本部発起者（岩切法電・岩尾昌弘・池野三郎・秦法励・東光了範・大神瑞章・大在芳達・合志諦成・金守初熊・立花紹道・中西牛郎・長末晋太郎・村上碩次郎・熊谷宏遠・松島善海・松本熊四郎・藤岡法真・神代洞通・手島春治・相浦完良・佐々木雪嶺・源達源）○本部役員（会長に相浦完良、常議員に井手三郎・池野三郎・中西牛郎・村上碩次郎・松島善海・神代洞通・手島春治・源達源、常務主任に竹馬光彦、会計主任に熊谷宏遠、主筆に中西牛郎、編輯員に金森初熊）○本部会員氏名（住所・姓名）○本部創立費寄付金芳名（金額・姓名）

広告　○海外宣教会○出版（新仏教論・真宗教史序論・宗教大勢論・組織仏教論・伝道会雑誌・反省会雑誌）○九州仏教倶楽部本部限定宿

（付記）総目次の作成にあたって、旧漢字表記が通例となっている一部の氏名を除いて新字体に変更し、明らかな誤字と認められた箇所は、適宜修正した。また雑誌の表紙等に掲載された目次と本文中と表記が異なる場合は、その都度適切と判断される表記とした。目次に記載されていない内容も可能な限り記載するように努めたが、広告等は一部省略した。